ＴＳ転生者のドタバタ冒険記

ファンブル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＳ転生者のドタバタ冒険記

【Ｎコード】
Ｎ３２０５Ｏ

【作者名】
ファンブル

【あらすじ】
アホな事と妹萌え意外特に特徴のない主人公がテンプレでネギま世界に転生。３－Ａ妹化計画を遂行すべく活動を開始するが何故か性転換しているし、やる事全てハプニング続きのドタバタコメディでお送りします。この駄文は文才の全くない作者の処女作であるためかなり至らない所もありますのでよろしくお願いします。
＜注意書き＞
この作品は転生最強物になります。またＴＳの要素や百合の要素また軽い性的描写を含みますのでこの注意書きを読んで不快に思う方

は読まないでください。なおもし読んで不快になられても作者は一切責任持ちません。

プロローグ（前書き）

はじめましてファンブルいいます。
この作品は転生最強物になります。またＴＳの要素や百合の要素また性的描写を含みますのでこの注意書きを読んで不快に思う方は見ないほうがいいと思います。なおもし読んで不快になられても作者は一切責任持ちません。

プロローグ

・プロローグ

何処かのジャングルの中俺は人生で最大のパニックを起こしていた。

「あぁ～最悪だ～！」

「何をいきなり愚痴をこぼしているのだよ、イヴ？」

混乱している俺の愚痴に対してのんきに尋ねてくるのがさっきから首に巻きついて離れない白い蛇である。

「だ～顔を近づけるな、俺蛇苦手なんだよ！」

俺はさっきから首に巻きついている蛇を取ろうと必死に蛇の体を引っ張っているが一向に離れない。引っ張り過ぎて首が締まり息が苦しくなってきた。

「おいおい蛇険するなよイヴ、蛇だけに。シュシュシュシュシュ～。」

「何が蛇だけにだよ、全然面白くね～よてか笑い方ウザい。」

「ひどいな、オイラ渾身のギャグと笑い方にケチ付けるなんて、今のギャグなんか親戚一同大爆笑のオイラの鉄板なのに。」

「なにが鉄板だ、だいたいおまえの親戚なんて全員蛇じゃねーか俺は人間だぞ。」

俺は怒りにまかせて蛇を引っ張る力を強めた。

「まぁまぁ落ちつけよ、後俺なんて一人称もうやめろよ、今は女なんだから。」

「たくいったいどうなってるんだ？はぁ。」

まったくどうしてこんなことになったのか。

俺の名前は、あれ名前が思い出せない、まぁいいや俺は転生者という奴だ。生前の俺は何処にでもいる普通・・・いや頭はとても悪いが他は平均前後のごく普通の何処にでもいるアニメ、漫画大好きの中二真っ盛り、ロリと妹萌え違いを説く事に青春の炎を燃やす高校2年生である。

気が付いたら真っ白な空間に無駄に偉そうな上モビルスーツ位でかい爺さん（神様）がいて「喜べ青年、君は選ばれた。」と訳のわからないことをほざいた。詳しく話を聞いてみると俺は死んでしまったらしい、神様のミスではなく極普通にアナシックレコードとやらが管理する俺の寿命が尽きたらしい。そんな俺が何故選ばれたかというとおれの死に様がすごかったからだ。なんでも俺はバナナの皮で爆死したらしい、聞いた当初はふざけるなとキレたが神様が「あれは正に筆舌に尽くし難い死に様だった、感動した。」と涙を流しながら握手を求められて仕方なく信じた。

結局俺は「神様のスゴイ死に様アワードハプニング部門」という、聞くからに脱力する賞を受賞しネギま世界に転生することになった。なぜネギま世界かというと「ワシが今嵌まっている漫画だから」だそうだ、転生するならワンピースかＮＡＲＵＴＯなどのジャンプ系

がいいとジャンプファンの俺はいったがそれらの世界には違う部門の「神様のスゴイ死に様アワード」受賞者がもうすでに転生しているのでダメだった。しかし３１人以上の妹か悪くない。

「受賞者には副賞で３つのチート能力を与えられるがどうする。」と聞いてくるので１つ目で不老不死かつ最強の肉体、２つ目で気と魔力の容量を上げられるだけ上げてもらい麻帆良の世界樹すら比ではない容量を得た。３つ目でジャンプ作品の技が使いたいと言ったが「他の世界の技だの技術などは手続きめんどいからヤダ」など神様がぬかしたのでキ「あぁ！地獄にたたき落とすぞ！」俺は良い子なので素直に聞きました。悩んだ末ネギの様なオリジナル呪文などを作れる開発力が欲しいと言ったら「あぁ、バカなお前が地道に努力してその領域に知識を高める頃には何百年前に転生しても原作終わってそうだ（笑）。」と理解を得られました（怒）。最後に「肉体はこちらでうまく調整しておく、他に何か要望はあるか？」と神様が聞いてきたので「エヴァが生まれるよりかなり昔に転生したい、３－Ａの誰よりも年上の容姿になりたい。」とお願いしました。はいエヴァにお兄ちゃんと呼んでもらいたいのです、ロリコン？違います、妹萌えです、最終目標は３－Ａ全員にお兄ちゃんと呼ばれることです。

「それじゃ、能力については現地で確かめろ、何年前に転生したかは自分で調べろ、じゃいってこい。」というなんとも優しい言葉をかけられた瞬間地面が消えて俺は真っ逆さまに落ちていき転生人生はスタートしました。待ってろよ、俺のまだ見ぬ妹たちよ。

「で今に至ると・・・。」

「何ぶつぶつ言っていんだ?そろそろ現実みろ、イヴ。」

「だ～～～～～!うるさい、転生したら巨乳の女になっているわ、首に蛇がからみついているわでこっちはパニックでショート寸前なんだよ！」

「まぁ、ゆっくり説明してやるから仲良くしよう、イヴ。」

「なんでこんなことに～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～!」

プロローグ（後書き）

この度、この駄文を読んでいただきありがとうございます。文才のない馬鹿が書いたものですのでおかしな点満載ですがもし感想等ありましたら優しい表現でよろしくお願いします。

1話　現状確認

・現状確認

「で、結局お前誰なんだ？」

転生して巨乳の女になってるわ、首に蛇が巻きついてるわでパニックになってから早数時間ようやく平常心に戻った俺はこの首に巻きついてる白蛇に尋ねた。そうすると蛇がこちらに顔を向け楽しそうに話し始めた。

「おお、ようやく落ち着いたか、じゃあまず自己紹介だ、オイラは神の使いでお前の３つ目の願いとお前の教育のために派遣された知恵の蛇だ、よろしくな、イヴ。」

「知恵の蛇？」

「まぁ、物知りな蛇と理解してもらえればいい。」

「はぁ・・・ん、３つ目の願いって開発力だっけ、それでなんでお前が派遣されるんだ？」

「ああ、それはな、知識が欲しいだけならばお前の頭に知識を刻み込めば終わりなんだけどお前が求めたのは開発力、これは広くかつ深い膨大な知識とそれを理解し応用できる力が必要なんだ。まぁあと少しの想像と発想かな。」

「なるほど、でもそれがお前が派遣された理由とどう関係あるの？」

蛇は溜息をつきながら頭を左右に振り話始めた。

「頭悪いな、だからお前にいくら知識を詰め込んでも頭の中に本棚をただ置いてある状態と変わらないから意味がないんだよ。詰め込んだ知識全てを理解してなかったらオリジナル呪文開発なんて夢もまた夢、記憶と理解は違うんだ、そしてお前には知識を理解する力はないバカだから。」

「なるほど、ちょ、おい、誰がバカだ！」

「本当に否定できるのか？お前のプロフィールと成績表は読ませてもらったがあそこまで酷いとある意味スタンディンオベレーション物だぞ。」

「う・・・・・・。」

くそ、言い返せない。

「そこでオイラが派遣された訳だ、お前が創りたい魔法の性能や特徴を言ってくれればオイラが創るって訳だ。ああ、ちなみにオイラとお前は運命共同体でお互い離れる事はできないからなまぁ仲良くやろうぜ、イヴ。」

「ちょっと待て、離れることが出来ないってだとすると風呂もトイレも何時も一緒か？」

「まぁそうなるな。安心しろ、プライバシーは守る。」

「マジかよ～。」

こんな蛇と２４時間３６５日一緒なんて最悪だ～。だいたい体に常時くっ付いている時点でプライバシーないし。しかし言えばどんな呪文も創ってくれるというのはなかなか便利だ、まぁここは妥協するべきか・・。

「まぁ仕方ない。そういうことならよろしく頼む。」

「おお頭は悪いが順能力はあるな、よろしく、イヴ」

「一言多い！あとさっきからイヴイヴうるさいお前の口癖か？」

「なに言っている？これはお前の名前だよ。」

「は？」

俺の名前？

「転生手続き書を書いたのなら知っているだろう？派遣される前の書類を見たらお前の転生後の名前書いてあった良い名前だな。」

「転生手続き書？なにそれ？だいたいそんなもの俺書いてないんだけど？」

「転生手続き書は転生者が違う世界に転生する時に書く書類の事簡単に言うと魂の戸籍登録書みたいなものだよ。本来はある程度は転生者本人に書いてもらうんだけど神様が勝手に手続きしたみたいだな。まったく勘弁して欲しい。」

「じゃ俺がこの巨乳の女になっているのは・・？」

「神様の手続きのせいじゃない？」

「あの爺ぶっ殺す。」

あの野郎俺の３－Ａ妹化計画を初めから頓挫させやがった。俺はお兄ちゃんと呼ばれたいんだ、だいたいお姉様なんて呼ばれたら・・・いいかも・・・いやいや違う違う俺百合違う。

「しかし名前は神様が勝手につけたとして性別を変えるようなことはしない筈だお前転生する時なんか言ったか？」

「何って・・え～と・・」

俺は蛇に転生時のやり取りを話し始めた。

「・・・でその時「エヴァが生まれるよりかなり昔に転生したい、３－Ａの誰よりも年上の容姿になりたい。」と言ったんだ。」

「おそらくそれだ。」

「え？エヴァが生まれるより昔に転生すると女になるの？」

「違う。「３－Ａの誰よりも年上の容姿になりたい」の所だ。」

「なんで？年上の男性の容姿になりたいという意味でお願いしたんだけど？」

３－Ａにはとても中学生には見えない容姿の子が多くいるので多少老け顔なっても年上としての外見的アドバンテージが欲しくてお願いしたのだけれど何がおかしいんだ？

蛇は溜息をつきながら俺に問いかけてきた。

「「３－Ａの誰よりも年上の容姿になりたい」この部分だけ聞くとまるで大人な女性になりたいとも取れないか？」

「なぬ！？」

まさかそんなことが確かにそれだけ聞くとそう聞こえなくもないなでもまさか・・・・。今の俺の容姿はモデル並みに背が高く、髪も黒く腰の部分までと長く、胸も生前お目に掛ったこともないほどでかい・・・言われてみれば確かに大人の女性の容姿だ。

「本来このような転生者との意思のすれ違いを防ぐために転生手続き書が存在するのだがまぁ仕方ない諦めろ。一度転生したらやり直しは出来ないし、もう一度「神様のスゴイ死に様アワード」狙うのもかなり厳しい。その容姿で転生を謳歌することを考えよう。」

そんな俺の３－Ａ妹化計画が３１人の妹たちにお兄ちゃんと呼ばれる壮大な夢が音を立てて崩れていく・・・。俺は、俺はいったいどうすればやはりお姉様と呼ばれるしかないのかそんなこと・・・・・いいかも・・・。

「って俺は百合じゃないんだ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～。」

2話　修行編開始

・修行編開始

開始早々夢も希望も打ち砕かれた俺だがせっかく転生したのだ、何時までもウジウジしてられん一先ず今後の方針を蛇と話し合おう。そして修行編開始だ。

「しかしここは何処だ、そして何時の時代だ。」

そう言いながら俺は辺りを見回す、周りは熱帯のジャングルでさっきから太陽が信じられない勢いでサンサンと輝いている。熱い死ぬ。

「ここは魔法世界のとある無人島だ。時代だが西暦１００３年前後と言ったところだろう。」

はぁ西暦１００３年？エヴァが生まれるよりかなり昔に転生したいとお願いしたがまさか原作開始１０００年前とは一体何年修行編やらす気だ、神様？

「てゆうか、なんでそんなこと分かるんだよ。」

「転生手続き書に書いてあった。転生手続き書ではこの他にも生まれたい出身地、家系なども指定することも可能だ。」

あの爺俺には自分で調べろとか言っておいてどれだけめんどくさがり屋なんだよ。

「この程度まだいい方だ。もっと酷い場合自分が死んだことも分か

らずにいつの間にか転生していた人間も多くいるからな。」
あんなのが神なのだからきっといつか滅ぶな地球・・・・。
「まぁいいや早速修行するか気か戦いの歌でも覚えないと1日で死ぬ自信がある。」
あ、でも俺は不老不死で最強の体なのだから必要ないのか。しかしこの体になってからあまり強くなった感じがしないな。むしろ胸が重くてなんだか肩が凝ってきた。
「前向きだな。先ほどまであんなにもいじけていたのに。」
「当たり前だ。生きている限り困難に出会うのは必須それを潜り抜けていくのが人生の醍醐味ではないか。たかが女にされた位で俺の3ーA妹化計画は潰せん。」
ふふふ先ほどまで絶望に立たされたが良く考えたらここはトンデモワールド魔法世界幾らでもお兄ちゃんになる方法はある。
「ほぉ、頭は悪いが非常に前向きだな。感心感心。」
「だから一言多いんだよ。このバカ蛇まったく・・・・ん、そう言えばお前名前は？」
「さっき言っただろう知恵の蛇だ」
「それほんとに名前か？お前親からも知恵の蛇って呼ばれているのか？」

「そうだぞ。」

「なんか呼びにくいな。俺が何かニックネームでもつけていいか？」

「別に構わんが。」

「だったら白蛇だからシロってどうかな。」

「安直で何の捻りもなく本人の知性のなさを象徴するようなネーミングセンスだがまぁいいだろう。」

「そこまで言うか！もういいお前なんかバカ蛇で十分だ。」

「まぁ落ち着け、別に嫌と言う訳じゃないんだ。ありがたくその名貰っておこう。」

「フン、まぁいいか。じゃあ改めてよろしくなシロ。」

「ああよろしく。これからオイラの名前はシロ一本で行こう色々あると混乱する。今のお前がイヴであるように。」

「ああそうだった。てかなんで名前変えなきゃいけないの？」

「深い意味はない。強いて言えば転生前の自分との決別だな。お前は生き返ったのではなく別人になったという意味を込めて。」

「ふーん、まぁいいや。」

そういう精神的な話は解んないや、まぁまずはえーと何からしようか。

「これからの事で悩んでいるならまずお前の体についていくつか言っておこう。」

悩んでいるとシロの方から話してきた。

「なに女から男にトランスフォームのやり方でも教えてくれるの？」

「あるかそんな方法お前はいつからコンボイになった。」

「いやコンボイは古いよ、今はオプティマス・プライムだよ。」

「いやコンボイだ。奴こそリーダーだ。」

「もういいよこの話は。」

「お前が振ってきたんだろうまったく。」

ぷりぷり怒りながらシロが俺の体について話し始めた。

「いいかお前は1つ目の願いで不老不死かつ最強の体になった。しかし無敵ではないことを理解しろ。」

「はい？」

「つまり不老不死で最強の体でも生命活動に必要な酸素、水、食物、睡眠は必要でこれらが不足すると普通の人間同じく活動に支障をきたす更に戦闘で傷つけば痛いし血も出るモチロン疲労もある、これらが酷いレベルまで達すると場合によっては仮死化する。」

「仮死化？」

「まぁ休眠状態の一種で一度仮死化すると本人ではどうすることもできずそこで眠り続けることになるから気つけろ。」

「仮死化を解く方法は？」

「栄養、水分、酸素などの不足の場合外部から提供されない限り目覚めん、攻撃による傷や極度の疲労の場合は肉体の回復によって目覚めるしかしこちらも外部から魔力を供給されないと起きられない場合があるから気をつけろ。」

「つまり俺は敵の攻撃より兵糧攻めとかのほうが弱いのか？」

「まぁそうなるな。」

「手足や首とか切られたら？爆弾なんかでチリも残らず消されたら？」

「体の欠損は例え内臓、脳でも仮死化時なら再生する。肉体が消滅した場合でも時間がたてばその場で復活する。」

「どれくらいで回復するの？」

「部分欠損なら1日で全快だが肉体消滅なら7日は必要だ。」

「分かったでも最強の体なのに弱点が多いな。」

普通最強の体と言ったらスーパーマンの様なものを考えていたがそうではないようだ。

「まぁ確かに何処が最強かと言うとまず免疫力だな、例えＴ－ウィルスが蔓延している地域でも鼻歌を歌って散歩出来、ゾンビに噛まれても唾を付けとけば治るしうつる心配もない。」

「いや、凄いけどそんな所散歩しないし。」

「更に魔法面においても凄いぞ、流石に魔法無力化能力程ではないがまず呪い、幻術、石化など俗に言うステータス異常系の魔法は一切効かないしかし攻撃魔法との混合系の場合は攻撃のみ通じるから気つけろ。」

「聞いているとあんまり凄いと感じないんだけどこれが最強の体なのか？」

「何か勘違いしているようだがこの最強の体とは健康を維持できるかで重い物を持ち上げることや、弾丸を跳ね返すようなものではない。」

「それって自分で体を鍛えなければ強くなれないってこと？」

「その通り。まぁ他の人間に比べて丈夫で健康な体だと考えてもらえればいい。」

「なんだかな～。」

最強の体が欲しいとしか言ってないし内容も聞いていなかったから仕方がないけどどうも想像と違うな。ほんとは気、魔力なしで戦艦とか持ち上げて投げ飛ばせるような体を想像してたんだけど・・・。

「しかし死なないなんて言う時点で十分はチート能力なんだからそれで十分か。」

「その通りだ。さて体について話した、そろそろ修行に移ろうか。」

「おお、待ってました。」

まずはどんな魔法を創ってもらおうかな、もうすでにいくつか案は考えてあるんだ。さーて俺強エエエエエエでもやるか。

「じゃあまずその話し方の改善から始めよう。」

「は？」

なに言ってんだこの爬虫類。

「だから話し方だ、女の体になったからには相応の話し方をしてもらうからな。」

「なんで？それと修行と何の関係があるのさ。」

「強いて言えばオイラの趣味だ。」

「オイラの趣味～？ふざけているのかこのバカ爬虫類！」

「ふざけてなどいない。これから何百年と行動を共にするのだ、レディの嗜み位身につけてもらう。でなければ修行はなしだ。」

「ヤダよ！なんでそんなことしなきゃならないんだよ。」

この蛇ふざけているのか俺はお兄ちゃん呼ばれるために男に戻ろうとしているのになんでお姉様化させようとしているんだよ。嫌がらせにも程がある。ここはビシッと俺の崇高な野望をこの爬虫類に教え込ませないといけないな・・・。

「いいかこのバカ蛇俺には崇高な目的があってだな、おま「話の途中で悪いが」あぁ何だよ。」

人が話している時になんだ、このバカ爬虫類が琵琶湖並みに広い俺の心ももう限界だぞ。

「後ろを振り返ってみろ。」

「は、後ろ？」

後ろを振り向くとそこには涎を垂らした１０ｔトラック程の大きさのドラゴンがいた・・・・・。

ぐるるるるるるるるるるるるるｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ

「シロ。」

「何だ。」

「あいつ実はとても人懐っこいてことはない？」

「ない。」

「もしかしてとってもヤバイ？」

「安心しろお前は死なない。ただ歯で噛みちぎられて胃で消化されるだけだ7日後にフンの中から復活する。」

「・・・・・・いやあああああああああああああああああああああああ」

ヤバイヤバイ食われる。俺は叫びながら全力疾走で逃亡した。

「あっコラいきなり動くな、食われるのが嫌なら認識阻害の魔法でやり過ごすから少し静かにしろと言おうとしたときに叫びながら逃げる奴があるか。見つかってしまった。」

「なにーー！そういう事は先に言え！」

ぐららららららららららららrrrrrrrrrrrrrrrr

ドス！ドス！

ドス！ドス！ドス！ドス！

ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！

ぎゃーーーーーーーーーーーー。追ってきた、しかも思ってたよりずっと速い。

「ふむ、ジャングルの木々が邪魔で飛べないようだが食われるのは時間の問題だな。」

「なに冷静に言ってんだよ、お前も食われるんだぞ！」

「安心しろ、俺は特殊能力で体を金属化できる。だから食われてもそのままフンと一緒に出て来られる。」

ふざけるなーーーー！なんでお前だけ助かるんだよ。

「オイどうにかしろ、シロ！」

「今のはシャレか？どうにかしろとシロなかなかセンスがいいじゃないか。シュシュシュシュシュ」

「うな訳あるか！」

「まぁ冗談だ、さていい機会だ。オイラのレディになるためのレッスンを受けるかそれとも食われるか選ぶといい。」

ちょ、この爬虫類なんて外道なこと言いやがる。

「普通の人間にはこんなこと言わないさ、お前は不死だからな一度食われてみるのも今後の為のいい経験だ。」

ヤバイどうする。このままだとドラゴンのランチは必須、しかしこの爬虫類のレッスンを受けたら何か大切なものを失う気がする。しかしフンの中から復活も何か大切なものを失くしそうだ。

「どっちもやだーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

結局それから３０分の逃走劇のあと俺改めアタシはレディになる花嫁修業をすることになりました。グスン。

3話　呪文って長くない？

・呪文って長くない？

あのドラゴンに追いかけまわされてこのバカ爬虫類に最悪の取引の結果、謎の花嫁修業なるものをやらされた。思い出すのも鬱になるのでダイジェストでお送りする。

「最初は話し方だ。まず、一人称を改めろ。」

「おいおい、本当にやるのかよ。じゃあ～僕とか？」

「ふざけているのかお前？私（わたくし）に決まっているだろ！」

「はぁ！お前こそふざけんな！何処のお嬢様だ？」

「これがオイラのポリシーだ。」

「なにがポリシーだ？お前まさかお嬢様萌えとかか？」

「・・・・・・これがオイラのポリシーだ。」

「やっぱりか！テメーの趣味に付き合ってられるか！俺は妹萌えでお兄ちゃんと呼ばれたいんだ。お姉さまスキルなどいらん！」

「お前、約束をやぶる気か？」

「約束はレッスンを受けることだ。お嬢様になる事は含まれていない！」

「レッスンの講師はオイラだ。」

・・・・・・・このあと、この不毛な会話がまる一日続き、結局口論の末一人称はアタシ、言葉遣いは勝気な少女風になりました。その後も良く分からないこの爬虫類の趣味丸出しの特訓をやらされる日々が続き俺はようやく普通の修行に入ったのは2年後でした。

「よくぞここまで良く耐えたなイヴ。」

「何が「良く耐えたなイヴ」よ！ふっざけんじゃないわよ。こんな無駄なことまる2年もさせるなバカ！だいたいこんな危険な猛獣わんさかの無人島で花嫁修業自体がおかしいのよ。何度猛獣のご飯になりかけたか、も～～～～～～～。」

この2年間気や魔法については何も教えてくれなかったし、そのおかげでこの2年リアルモンハンワールドでサバイバルすることになって一日3回は死にかけたわよ。あっ、アタシ不死者だから死なないか・・・・でもむかつくーーーーー！

「シュシュシュシュ、まぁそう怒るな。でもそのおかげで一通りの魔法なしでのサバイバル技術を覚えることが出来ただろ？しかしその口調板についてきたな。」

「む、何をぬけぬけとあんたが男言葉喋るたびに噛み付くからじゃないこのバカ蛇！」

おかげで思考内の言葉もすっかり女言葉、男に戻った時どうしよう、ホモに見られちゃう。

「まぁまぁ落ち着け、まったくもっとお淑やかにしようと思っていたのに・・・はぁ。」

「きーーーーーーー！蒲焼にしてこの場で食ってやるわよ！」

アタシはその場にあった石包丁（アタシ作）を掴んで振り上げた。

「まぁ。冗談はさておき修行を始めるか。」

「2年前からすぐ始めなさいよ！」

「まぁ、この2年のサバイバル生活のお陰でお前の身体能力は格段に上り、気が出やすくなっているはずだ。というか今出しているじゃなか。」

「はぁ？気が出ている？」

アタシは自分の体を見てみると薄い半透明なオーラの様なものが全身を包んでいた。

「正直言うとお前が花嫁修業し始めてから半年位で出るようになっていたのだがオイラが作為的に気が出ないようにしていたんだ。」

「・・・・・・・一応聞くけどなんで？」

「バカなお前に気にしろ、魔力にしろ、口でコツを言っても効率が

良くないと考えた。だからお前の場合、体で覚えさせる事にした。」

「フーン、じゃあなんで気が出始めた時に教えてくれなかったの？あと誰がバカよ。」

「教えたらサバイバルにならないだろう？お前の気や魔力は非常に膨大すぎる。それを制御してもらうには高い集中力と精神力を求められる。常に死と隣り合わせの状態でこれらを養って貰うつもりだったんだ。」

「なるほど、じゃあ花嫁修業なんてのは嘘でそっちがメインだったのね。何だ、ちゃんと考えていたんだ。」

「まぁな、言葉遣いを直したかったのも事実だが。」

「そういうことなら安心したわ。もう最近はあなたを殺す事ばかり考えていたわ。」

アタシは手に持っていた石包丁を放り投げた。

「おいおい物騒だなシュシュシュシュ。（まぁ先は長いんだ。これからゆっくりお嬢様にしていけばいい。）」

「でこれからどんな修業をつけてくれるの？」

「それはお前の要望を聞きながらだな、早速だがどんな事がしたい。」

「どんな事？う～ん。」

「まぁまずやりたいこと口にしてみろ。」

私はやりたいことを言いながら指を折っていった。

「まぁまず魔法は使いたいし将来的には剣術や武術もしてみたいから気も強くしたいし後他には～～～回復はアタシ不死者だからいらないかな～～ん？」

「どうした？」

「ねぇ私の魔力って近衛木乃香より多いのよね？」

「多いぞ、比較するのがバカらしくなる位な。」

「じゃあ永久石化とか直せる？」

アタシがそんなことを言うとシロは目をパチクリさせて

「・・・・少し意外だな、まぁ答えはＹＥＳだ。お前は近衛木乃香の様な癒しの魔法の適正はないが魔力の量で押し切る事が可能だ。しかしそれ相応の技量が必要になってくる。」

「ふむふむ、ならそれも覚えるわ。時間はたくさんあるんだからね。」

出来ることは多い方が何かと便利だしまだ見ぬ妹たちにいいとこ見せたいしそれに石化された妹候補がいるかもしれない。ふふふ。

「あと開発して欲しい魔法もあるんだろ。それについても聞こう。」

「ああ、忘れてた。アンタが開発してくれるのよね。えとまず・・・・・・」

この後アタシは開発して欲しい魔法について話した。ジャンプ作品の技や技術が持ち込めないならネギま世界の技術で再現してやるんだから！見ていなさい神様！

「ふむ、分かった。いくつか試してみないと分からないがだいたいできる筈だ。」

「ホント？いくつかダメもとで言ったのもあるけど、ほへ～流石神様の使い。」

なんだかんだ言ってもやっぱり頼りになるのよねコイツ。

「シュシュシュ当然だ。しかし性転換の魔法を創って欲しいとは言わないのだな。」

「うん。どうせあんたポリシーがどうとかで拒否するんでしょ？」

「分かっているじゃないか。シュシュシュシュ！」

「見てなさい。絶対に男に戻ってやるんだから！」

「期待しないで待っているさ。シュシュ。」

くーーーーー！悔しいけど今は我慢！チャンスを待つのよイヴ！

「さて魔法の修行を始めるに至ってオイラからのプレゼントだ。」

そう言うとシロは呪文か何かをぶつぶつ言いって尻尾を一振りすると空から箱が落ちてきた。アタシは箱を開けるとそこにはローブにとんがり帽子、箒、分厚い本が一冊。

「これは？」

「お前用の「魔法使い初心者セット」だ。ただし教本には既存の魔法の中からオイラが編集した特別版さ。」

「おお！ってあれ杖は？もしかして箒が杖代わりなの？」

「いや杖は目の前にある。」

「え？何処？」

アタシは辺りを見回したが杖らしきものは無かった。

「オイラが杖だよ。」

「はっ？」

「まぁ見てなよ。」

そう言うと今まで私の右腕に絡みついていたシロが右手の掌の上まで来る。

「オイラを握ってごらん。」

「こう？」

アタシがシロの胴体を握るとシロは堅くなって形を変えていき３０ｃｍほどの白い蛇の意匠の短杖に姿を変えた。

「おお！」

「まぁこの他にも杖、杖鞭、ブレスレット、首輪などに変身可能だ。さらにお前の魔力制御の補助やオイラ自身が魔法を使うことも可能だ。しかし魔力はお前から引き出すことになるがな。」

「へ～あんたってホントに便利ね。」

「シュッシュ、あんまり褒めるなよ。照れちまうよ。」

シロは短杖状態で嬉しそうに声を上げて振るえていた。これでアタシを男に戻してくれたら文句なしなのにね～。

「よし早速呪文を唱えてみろ。まずは「プラクテビギ・ナル火よ灯れ」だ。」

「あっ、ライターみたいな魔法ね。いいわ！こんな魔法すぐに習得してやるわよ。」

「よし！その意気だ。」

「見てなさい、プ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「どうした？」

「続きなんだっけ？」

「おい！一文字しか覚えてないじゃないか。」

「だって長いんだもん、呪文！」

「初歩の初歩で一番短い呪文だぞ！これすら覚えられないとはお前の前世は鶏か？」

「だれが鶏よ、前世は普通の高校生よ！」

シロは呆れるように頭を左右に振った。なによ～こんなの覚えている奴の方がおかしいのよ。

「この調子だとお前が予定している修行過程全て終えるのに１００年はかかるぞ。」

「１００年？嘘でしょ？」

１００年も修行なんて冗談じゃないわ。早く可愛い妹を探しに行かないといけないのに。

「いや本当だ。これでも少なく見積もった方だ。ヘタしたら３００年位かかりそうだ。嫌なら死ぬ気で覚えろ。」

「う～～～いいわよ。アタシの真の実力見せてやるんだから～～～～～～～～～～～！」

こうしてアタシの修行は最悪の困難を極めて結局３００年掛りましたとさ。チャンチャン！

閑話　その１　黒髪の魔女の噂

・黒髪の魔女の噂

皇暦３６８年（西暦１３５３年）

ヘラス帝国の辺境の町のとある酒場の片隅で二人の賞金稼ぎがこれから狙う獲物について夕食を食べながら話していた。

「モグモグ、でなんて言う賞金首だっけ？ジェット？」

賞金稼ぎの二人の内、丸くて大柄な体格のネコ型獣人がテーブルの上にある料理を食べながら中肉中背のイヌ型獣人に話しかけた。

「おい！何度も言わせんなよマル！黒髪の魔女だよ！」

ジェットと呼ばれた犬型の獣人はこの二人の間ではいつもと変わらない予定調和なやりとりと分かっていながら何時もと変わらない怒り方で彼の相棒であるネコ獣人のマルを叱りつけた。

「ああ、それそれ。」

マルの方も怒られている事も気にせず何時もと変わらない返事をジェットに返した。

この二人の賞金稼ぎは同じ村で同じ時期に生まれてからずっと一緒の幼馴染である。二人は一旗揚げようと拳闘士として故郷の村を旅立ったものの現実はそう上手く行かず勝ち星を上げられず拳闘士崩れのチンピラとなり職を転々とし今は賞金稼ぎをしている。普段二

人が狙うのは物取りの常習犯や家畜泥棒の常習犯などの軽犯罪者ばかりで勿論賞金も安くその日暮らしな毎日であった。マルはそんな毎日を結構気に入っているのだがジェットは不満があるらしく今回大物を狙うべくこの町に来たのである。

「今回のヤマは今までとは比べものにならない。うまく行けばしばらく遊んで暮らせる位の賞金を得られるんだ。たるんでんじゃねーぞ！マル！」

「分かっているよジェット。でも黒髪の魔女ってあの黒髪の魔女の事だよね？」

「ああ。あの黒髪の魔女だ。」

黒髪の魔女。それは北部南部関係なく何処からともなく現れて人々を救って去っていく謎の人物。最早おとぎ話の一つとして話されている伝説の魔女である。どのようなおとぎ話が伝えられているかというと「１００人を超える盗賊団を一瞬で蹴散らした。」「悪政をしく領主の城を僅か数分で瓦礫の山にした。」「海を凍らせた。」「永久石化の呪いを解いた。」「日照り村に雨を降らせた。」「巨大な嵐を一撃で消し飛ばした。」「地震を起こして大津波で海賊船を沈めた。」「雷を切った。」「実は剣士で山を切り崩した。」「どんな治癒術師もさじを投げる様な怪我人を治した。」などなど本当か嘘かも分からない噂が探せばあふれ出てくるほどだ。

「そして俺たちはこの黒髪の魔女を探す為にこの町に来たんだ！」

ジェットが興奮するように声を上げ、手に持っていたグラスで机を強めに叩いた。

「ふ～～ん。でもオラ黒髪の魔女なんておとぎ話だけの存在だと思っていたよ。でもどうしてこの町なのさ。」

「フフフ。まぁそれは俺の緻密かつ正確な情報の収集と分析の賜物で俺は・・・・ん？おい！ネーちゃんビールお変わりくれ。」

ジェットは得意げ話しながらビールのグラスに口を付けたが中身が空っぽなのに気づいて近くのウェイトレスに声をかけた。

「ハ～イ、ただいま。」

声をかけられてビールを持って来たのはメガネをかけた黒髪で腕に白い腕輪をしネコミミの胸のとても大きな亜人のウェイトレスだった。

「はい。ビールどうぞ。」

「おう、すまねーな。」

ウェイトレスはジェットに笑顔でビールを渡す。ビールを机に置くとき女は前かがみになり胸が強調されジェットはつい凝視してしまった。

「お二人はどうしてこちらに？」

とウェイトレスが聞いてきた。この町は岩場の険しい地形に囲まれておりまた帝都に続く街道からも大きく外れている為に外から人が来ることが珍しいのだ。

「えっ？あ～、ちょっと人探しかな。」

胸を凝視することに集中していたジェットは急な質問に少し驚き慌てながら、言葉を濁して答えた。情報は出来るだけ外に出さない方がいい特にここは賞金首が潜伏している可能性ある土地だ、下手に噂になって逃げられたりしたらこちらの計画が潰れてしまう。

「僕たちは黒髪の魔女を探しに来たんだ。」

「ちょ、マルなに言ってんだ！」

しかしマルは空気も読まず、あっさりとウェイトレスに答えてしまった。

「黒髪の魔女？・・・げ、もう来たの。今回はヘマはしてない筈なのに・・・。」

マルの答えを聞いたウェイトレスは難しい顔をして何か小声でブツブツ言い始めた。

「ん、どうした？何か知っていんのか？」

少し不審に思ったジェットはウェイトレスに問いかけた。

「へ？い、いえ別に何も知りません。あまり外から人の来ない町なので最近そんな人来たかなと少し考えていたのですが心当たりありませんね。」

「おっ！そうなのか。だとすると変装していんか？・・・または・・・。」

ウェイトレスがジェットの問いに慌てるように答えていると今度はジェットが難しい顔をしてブツブツ言い始めた。

「おーーい、イヴちゃんビールお代わり！」

「あっ、ハーイ、今行きまーす。」

別の席からウェイトレスの呼ぶ声が聞こえた。彼女の名はイヴと言うらしい。彼女は駆け足で声のした方へ行ってしまった。

「ジェット、ジェット。」

「いや目撃情報に間違いはないはずだ、ここしかあり得ない・・・・・強力な認識阻害魔法？・・・いやいや・・」

マルが声をかけてもジェットは一人考え込んでしまってマルの声が届いていない。

「ジェット！ジェット！」

「ん？どうしたマル？」

少し声を大きくしてもう一度呼んでようやく彼は思考の海から浮上してきた。

「ウェイトレスさんもう行っちゃったよ。それに話の途中じゃないか。」

「へ？あーー悪い悪い。えっとさっきの話の続きだな、えーと俺はまず黒髪の魔女についてあらゆる情報を調べたんだ。」

「ああ、最近色々と調べ物しているかと思ったらそのことを調べていたんだ。」

ジェットは魔法の才能はなくまた腕っぷしも強くないが頭の回転が速く情報収集能力に長けており今までの賞金首も彼の前もっての事前調査があったから上手くいっていた。ジェットが探しマルが捕まえる、そうしてこの二人は上手くやってきた。

「まず黒髪の魔女が現れ始めたのは皇暦５０年頃エリジウム大陸で目撃情報が出てきた。それから少しずつだが黒髪の魔女の活動範囲は広がり皇暦１００年頃にはヘラス帝国でも目撃情報が出てきて皇暦２００年頃にはオスティア周辺での目撃例が多発してそのまま皇暦３００年頃までオスティアを中心に広く活動していた。賞金が出始めたのはこの頃だ。」

「へぇ、良く調べているね。でもそんな昔から生きているとすると吸血鬼か悪魔？」

「まぁこれぐらいは歴史や民俗学の本ですぐ調べられた。実際黒髪の魔女について調べている学者は少なからずいるし題材にした文献や物語も多くあるからな。あと吸血鬼や悪魔の類ではないらしい。今まで黒髪の魔女に襲われて血を吸われた、石化させられたなどの目撃情報や報告は一度もないらしいし、逆にそういうのを退治しているからな。噂では不老不死の魔法の開発に成功した賢者であると言われている。」

「へ～～～。物語は子供の時オラも絵本で読んだよ、手に雷を宿す魔法で竜を退治するやつ。」

「皇暦３００年を過ぎて賞金首になってからは黒髪の魔女は拠点的なものは持たず常に移動し続ける状態で目撃情報も少なくなった。」

「でも人助けはやり続けているんだろ？なんでそんな人が賞金首になるの？」

「黒髪の魔女はどこの国にも組織にも所属しない自由を愛する人物で人助けに関しては「やりたいからやってる」と言い切っているらしい。自らと敵対するならば時には国にも組織にも単身戦いを挑み勝利してきたって話だ。ただ国も組織も立った一人の女に退けられたなんて恥を今まで隠してきたが今から５０年程前メガロメセンブリアの正規軍数千人を一人も殺さず無力化したとかで各国のお偉いさんも脅威と見て重い腰を上げたって噂が流れている。しかし賞金は６００万ドラクマだ十分信憑性があるがな。」

「なんかホントに凄いね。でもそんな賞金首オラ達じゃ絶対捕まえられないよ。どうするのさ？」

「まぁ聞け。実は賞金は６００万ドラクマだが、奴の映像記録にも賞金が掛けられているんだ、今までまともな映像記録がないので有名らしく、映像記録だけでも６０万ドラクマまた有力な目撃情報を提供しても１万ドラクマだ。確かに俺達が奴を見つけて捕まえようとしても瞬殺されんのは目に見えているが映像記録や目撃情報の賞金ならまだチャンスはある筈だ。最悪目撃情報だけは絶対掴んでやるからな！」

とジェットは宣言すると鞄からルーペの様なもの出した。

「あっ！それ帝都で話題の最新式のルーペ型映像記録機、手ぶれ防止機能の精霊が付いているので話題の奴じゃないか。いいな～オラ

も欲しい。」

マルは興奮しながらルーペを指さした。

「お陰で今までの貯金はパァだがこれが成功すればカツカツの貧乏生活とオサラバさ。」

ジェットは楽しそう言いながらルーペを鞄の中に戻した。

「そういうことなら分かったよ。でも黒髪の魔女の容姿なんて分かるの、ジェット？」

「その辺も調査済みさ、目撃情報と噂からおおよそ検討は付いている。まず二つ名の由来の黒髪で長さは腰の所までのロング手入れなどは一切してないボサボサらしい。服装は黒いローブにトンガリ帽子のまさに魔女って感じの格好だ。外見の年齢は２０代。瞳の色は緑。常にペットか使い魔かは分からんが白い蛇を連れている。あとかなり胸がでかくて種族は外見を見るからには人間だそうだ。以上ここまではどの目撃証言でも共通して言えることだ。しかし戦闘スタイルは目撃情報、噂ともにかなりばらつきがある、魔法も今まで誰も見たことないものばかりで場合によっては剣や徒手空拳で戦っていたという目撃情報もある。おそらくかなり高位な魔法剣士と俺は見た。」

「よくそこまで調べたね。やっぱり君は探偵でもやったらどうだい。」

マルがそう言うとジェットがしかめっ面いた。

「別に調べるのが好きな訳じゃねーよ。ただ必要だからしているだ

けだ。」

ジェットはこのような下調べの仕事を格好悪いと思っており褒められると怒るのだ。

「でもジェットには天職だと思うな。好きじゃないとは言うけど何かを調べている時の君は楽しそうだよ。」

マルはニコニコ笑いながらそう言った。

「うるさい！もうこの話は終わりだ。一先ず最近の目撃情報を分析するにこの町にいる可能性は極めて高い。そんな広い町じゃないんだ、明日からしらみつぶしに探すぞ。」

「うん分かっよ。フー。さてお腹もいっぱいになったし行こうか？」

見るとマルの前にある料理の皿がいつの間にか全て空になっており

ジェットのグラスも空っぽだったので二人は酒場出ることにした。

「おう！じゃあ宿屋にもどるか。ネーちゃんご馳走さん金ここに置いとくから。」

「ごちそうさま」

二人は席を立ち机に代金を置くと酒場を出て行った。

「ハーイ。ありがとうございましたー！」

酒場にはウェイトレスの二人を見送る声が響いたが店内のざわめきですぐかき消された。

賞金稼ぎの二人が酒場を出た後もウェイトレスの仕事は続き、仕事が終わったのは夜中になって店がしまり店の掃除が終えた後だった。翌日、そのウェイトレスは姿を消し彼女目的の客たちは大いに悲しんだのだった。

蛇足だがこの二人の賞金稼ぎのその後について話そう。翌日から黒髪の魔女を探すが昨日の夜中の内に逃げられたのだった。それから彼らは１０年間黒髪の魔女追跡を行ったがついに黒髪の魔女を見つける事は出来ず諦めて故郷の村に帰って結婚しそれぞれ幸せな家庭を築きました。しかし犬型獣人は故郷に帰った後も黒髪の魔女について調査し続け、黒髪の魔女が現れた頃から皇暦４００年頃に黒髪の魔女の目撃情報がぱったり消えるまでの記録や噂の歴史的検証と彼自身の推測や考察を乗せた本を出版し黒髪の魔女ファンの間では黒髪の魔女の初期の歴史を知るためには必要不可欠なバイブルとされ現代まで続くロングセラーとなった。

なお本の題名は「黒髪の魔女の噂」である。

4話　そうだ、現実世界に行こう

・そうだ、現実世界に行こう

皇暦３６８年（西暦１３５３年）

酒場で二人組の賞金稼ぎが話していた日と同日の深夜から話が始まります。

ＳＩＤＥ　イヴ

「おいし～！このサンドイッチ！ハムとスパイスの絶妙なハーモニー！」

アタシが店を去ってから１時間が経過していた。現在アタシは竹箒で砂と岩だらけの荒野を１０ｍにも満たない高さで低空飛行しながらお店の亭主さんから貰ったバスケットの中のサンドイッチを食べていた。

「おい、行儀悪いぞ。食べるか飛ぶかどっちかにしろ。そんなんで淑女になれると思っているのか？」

右腕に絡まっているシロから説教が飛んでくる。

「別にそんなこと気にしなくても良いじゃない。誰かが見ている訳じゃないし。だいたいアタシは淑女に何かにならないわよ！まぁいいわ、あんたも食べる？おいしいわよ～。」

アタシは食べかけのサンドイッチをシロの顔の前に差し出した。す

るとシロは大きく口を開けサンドイッチを丸飲みした。

「フム、なかなかの出来だ。」

シロが満足そうに言う。

「でしょ。あーあ本当はもっと長居するつもりだったのに嫌になっちゃう。あそこご飯おいしいし町の雰囲気好きだったのにな～。」

アタシは愚痴を言いながら箒にぶら下げたバスケットから新しいサンドイッチを出して食べ始めた。全く本当に賞金なんて迷惑な話だわ。しかし今回は見つからないように町ではメガネとネコミミを付けて変装してお淑やかに演技までして生活していたのに1週間も経たずに居場所が特定されてしまった。おかげでこんな深夜に夜逃げ同然に店を出る羽目になった。

お店の亭主さんもその奥さんも良い人だったなぁ。たまたま奥さんが腰を痛めている所にアタシが居合わせ魔法で治してあげたらアタシが賞金首だと知っていながら住み込みで働かしてくれるし、急遽こうして町を出ることになっても少し多めのバイト代と夜食のバスケットまで持たせてくれた。あんな良い人たちをアタシの事で巻きこめないしね。

「こんなことになったそもそもの原因はお前の行き当たりばったりな行動のせいじゃないか！いらない事に首を突っ込み続けとうとう賞金首になってしまったじゃないか！」

「むっ、その話はもういいでしょ？５０年前も昔の事よ？水に流しなさいよ。」

「水に流せないから怒っているんだ、バカ！」

この蛇は５０年前の事をネチネチと。

５０年前罪のない可憐な少女（妹候補）を処刑しようとしたメガロメセンブリアからアタシが華麗に助ける筈がいつの間にか８千人の軍勢にかこまれて仕方ないので全員頭だけ地面に出して後は地面に埋めてやったら、何故か賞金首にされるは、助けた可憐な少女（妹候補）は実は男の娘だったと踏んだり蹴ったりだった。おまけにこの男の娘にお姉様と呼ばれて妙に懐かれて大変だったのよね。そのあとその子の保護者ぽい連中にその子マル投げして逃げてきたけど・・・。

まったく男の娘にお姉様なんて呼ばれても・・・・悪くない・・・いやいや不味い不味い。はぁ、なんか最近精神も女になっているのかな～。まぁ妹を愛する魂は無事だけど最近は弟（可愛い子限定）もいいかな～なんて考えてしまう今日この頃。何かヤバイ。このままだとアタシ男も女もどっちも良い人になってしまいそう。それって人としてどうなの？アタシもしかして新人類（ニューカマー）？

だいたいなかなか妹候補自体見つからないのよね。見つけたと思ったら実は既婚していたとか子持ちとか妹になる前に違う称号にチェンジし終えている子ばっかり。はぁ。

賞金首にされてからは賞金稼ぎから逃げ回りまた各国の特殊部隊に襲撃され散々な目にあっている。あいつら超しつこいし悪質な奴は周りの人間を巻きこんだりと迷惑な奴ばっかりでうんざり。おかげでこちらは妹探しもまともに出来ない状態、はぁ。

「修行の旅が終わったら次は逃亡生活か～まっ、無人島で引き籠っ

ているよりかは楽しいからいいけど。」

今から３５０年前、無人島で修行を始めたアタシだったが魔法の習得は全く上手くいかなかった。

気については最初に体で覚えたのもあり肉体のトレーニングと並行して行って着々と技量を積んでいった。

シロも魔法は諦めて気一本で行こうと言ったがアタシは断固拒否した。折角神様から貰ったチート能力なのに諦めるって何よ！だいたい魔法諦めたらこのバカ蛇は、アタシにへばり付いている小言製造機じゃない！

もはや意地以外の何物でもない努力をし続けたアタシだったがその甲斐があったのか３５年目にしてようやく魔法学校入学レベルの魔法を習得できた。一度コツを掴めばペースは非常に遅いものの着実に習得してゆき５０年目にしてようやく高位の魔法使いレベルまでに成長した。

それから修行の場を無人島から魔法世界全土に移し実戦の中で実力を積んでいった。ここで驚くべきことが分かった。アタシは実戦の中の方が何故か魔法が何故かすんなり覚えられるという変な体質であったのだ。シロの考察では「前世での記憶でお前は、座学は出来ないと思い込んでいる（実際出来ない）節がありそれが魔法習得を邪魔し続けたのではないかと考えられる」との事である。言っている事は全くよく分からないけど、要するに実戦に勝る修行は無いってことね。

でも持ち前の膨大すぎる魔力とオリジナル呪文の理論習得またその他色々な足らすぎる知識習得もありやはり魔法の習得のペースは非

常に遅かった。全くなんで魔法やるのに理科だの数学だの外国語なんて覚えなきゃいけないのかしら？頭おかしいんじゃないあのバカ蛇？修行開始３００年目にしてようやくシロが予定していた修行を終えることが出来た。くーー長かった～。

気に関しては修行開始５０年目にシロの修行は完了しておりそれからは自己流で剣術や武術の修行をして、いくつか技も再現することに成功した。

「まったくおまえはいつも先のことも考えず頼まれたら安請け合いして・・・ブツブツ・・。」

あっ、こいつまだ説教している。

「もういいじゃない。それに悪いことしている訳じゃないんだから確かに色々国やら組織に迷惑かけてきたかもしれないけど私も賞金掛けられて、迷惑しているんだからお互いさまじゃない。今は未来のことを考えましょう。」

「くっ、こんなことならもっと花嫁修業しとけばよかった。そして今頃は社交界の華になっていたはずなのに！くっ！」

「まだそんなこと言ってんのアンタ？」

もうそんなの修行の記憶なんか抹消したわよ。

「しっかしアタシは何時になったら男に戻れるのかしら？」

「ん？なんだ、お前こそまだそんなこと言っているのか？もういいじゃないか。女のままで、行く先々でモテモテだったじゃないか。お淑やかになれば今の3倍はモテるぞ。」

「ふざけんじゃないわよ！誰のせいでこんな姿になったと思っているのよ！」

こっちはこの体のせいで男と話すときはまず顔より先に胸を見られるし、声かけて来る奴らは皆下心丸見えだしもう男って客観的に見たら最低ね。女からも胸を見て睨まれるしもうどうしろって言うのよ！しかも最近は弟（可愛い子限定）も良いかななんて考えている始末、早くしないと色々と取り返しのつかない事になりそうで本当に怖い。

「誰のせいってそりゃ神様のせいだろ？」

「まったくそうよ、全部あいつのせいよ。」

この怒り３５０年たった今も収まる事を知らないし、も～～～サイアク！

「まぁいいわ。いない奴の事なんて怒っても話進まないし。」

「相変わらず、脳味噌は腐ってそうだが切り替えは早いな。凄いぞイヴ」

「あんた本当に蒲焼にするわよ。」

こいつは本当に一言多いのだから。

「しかしまさか性転換の秘薬が効かないなんて、はぁ」

そうなのだ。修行の旅をしている途中に性転換の秘薬の情報を得て、薬のレシピをやっとの思いでオスティアにて発見し製作を開始したの。しかし材料が貴重なのばかりで集めるのに何度死にかけたか。薬の調合をシロに任せていざ飲んでみたが何の変化も起きない。シロがわざと失敗したのかと思って問い詰めたが「オイラのポリシーに賭けて失敗はない。」と言い切るのでその辺にいたオスの犬に試しに飲ませてみたらメスになったので薬自体は本物だったのだが・・・。

「まさかお前の最強の体が秘薬を毒と認識して無効化したなんてな。残念だったな。シュシュシュシュ。」

「うるさい、このバカ爬虫類！あの薬作るのに１０年掛ったのよ！」

こんな事になるのだったら最強の体なんて頼まなきゃ良かったわ。性転換の魔法や儀式も探してみたけどどれも秘薬と同じ系統の技術みたいだからおそらく効かなそうだし。

「次に聖杯とかランプの魔人とかドラゴンボールとかの願いを叶えてくれる凄いマジックアイテム探したけどこっちはガセ情報しかなかったし。魔法世界ならあると思ったんだけど、はぁ。」

「まぁ、そんなものがあるなら魔法世界は救われていると思うがな。」

「・・・・・それもそうね。・・」

そんなものがあるならネギまの世界も、もっと明るくなりそうよね。

「しかし参ったわね。このままだとエヴァンジェリンにお姉様なんて呼ばれてしまう。」

それだけは何としても阻止しなければこのままだと本当に取り返しがつかない領域に行きそう。

「良いじゃないか。お前が兄だろうが姉だろうが妹には変わりない。」

「まぁそうかもしれないけど、やっぱこだわりというかポリシーというかそう言うのがあんのよ。やっぱ違うのよ、お姉様と呼ばれるのとおにいちゃん呼ばれるのは。」

「どう違うのだ？」

「いい！アタシは妹萌えなの、真の妹萌えはお兄ちゃんと呼ばれただけでご飯がどんぶり3杯いける人のことを言うのよ。ついでにアタシは6杯いけるわ。まぁ最近は不本意ながらお姉様（おねいちゃんも可）でもご飯2杯はいけるかしら。でもご飯6杯と2杯じゃ差があり過ぎるでしょ？」

「分かった。お前の脳がショートしている事だけはよく分かった。もう黙れ。」

むっ、何よコイツ。聞いてきたのはそっちじゃない。

「まぁ、お前が兄だろうが姉だろうがどうでもいいがしかしどうやって現実世界にいく？」

「どうやって？ゲートで行くんでしょ？」

アタシがそう言うとコイツは頭を左右に振った。コイツが呆れている時の癖だ。むっ！なによ！

「お前賞金首だろう、どこのゲートポートに行くつもりだ？」

「あっ。」

そうだった。ヤバイどうしよう。

「仮に密航するにしても身分証明やらの書類をどうする？」

「えーーとそれは闇ルートで偽造するなりすれば・・・・。」

「無理だな。殆どの裏の組織がお前に恨みを持っている。お前今までいくつの犯罪組織を潰したか忘れたか？」

「・・・・・１００は超えていないと思うけど・・・・」

まぁ潰してない敵対した犯罪組織を合わせると余裕で３００はいくけど・・・・。でもそれじゃあ、どこのゲートポートも行けないじゃない。まいったわね、どっかにないかしら手続きとかないゲートポート・・・・・・・・ん・・。

「そうだ！じゃあゲートポートを作れば良いんじゃない。」

どっか人里離れた場所に作ればいいのよ。うんアタシって天才。

「オイラもそれは考えたがこう何処へ行っても賞金首や特殊部隊が追ってくる現状で一ヶ所に留まってゲートを作るのはなかなか難しいぞ。色々と資材なども多く必要になるからそれらの物資搬入の流れで見つかる可能性大だ。」

「むーーーじゃあアンタの開発力で何とかならないの？」

「流石にゲートを呪文だけで再現するのは難しいな。まぁ方法がないわけじゃないが。」

「なんだ有るんじゃない。もったいぶらずに教えなさいよ。」

「はぁ。ゲートポート版のカシオペア（航時機）のようなものを作る。まぁ懐中時計程の小型化は今の所は不可能に近く、これからの拠点を作る意味でも船型が良いな。この場合は航界船かな。」

なるほど小型船くらいならその気になればどこにでも隠せるし船なら今後のアタシの移動拠点に出来るわね。

「じゃあ、早速作りましょう。船ならどこでも調達できるわ。」

折角だからデザインに力を入れたいわね。色々候補はあるどれにしようかしら。

「まぁ落ち着け。言うのは簡単だがこの方法はリスクが高いのだ。」

「リスク？」

「まぁ例えるなら現実世界と魔法世界の間に幅の広い川が流れているとする。この川が世界と世界を隔絶している空間や壁だ。本来の

ゲートはこの川にゲートポートという橋をかけ世界と世界を行き来しているがオイラ達の方法はこの川を船で横断しようとしているのさ。」

「なるほど。でもそれのどこにリスクがあるの？」

「川を船で横断すると川の流れの影響で真っ直ぐ横断することは難しい。つまり向こう岸の目標としている地点と誤差が生じる、この場合少しの誤差で地球のどこに到着するか分からなくなる。下手すると地面の中に出現して生き埋めなるなどの可能性もある。それどころか宇宙空間に出現する可能性もある。いくらお前でも宇宙は無理だ。」

「ふーーーん、なるほど。解決方法は？」

「解決するには色々必要になるが最低でも高い演算能力を持つ電子精霊かスーパーコンピューターが必要だ。世界を移動中の誤差をリアルタイムで計算及び修正し誤差を失くしていく。しかし発明されるのはどちらも６５０年程先のしろものだ。」

「うーーーん、アンタ作れないの？電子精霊かスーパーコンピューター。」

「スーパーコンピューターは設備も資材も無いから無理だ。まぁ電子精霊ならなんとか作れるがかなりの時間と労力が必要だ。それにこの方法はまだ机上の空論だ。かなりの実験と試作が必要になってくる。」

「面倒くさいわね～。でもそうしないとエヴァに会えないなら仕方ないわね。作りましょアタシ達の船を。」

「じゃあ早速船の調達と資材集めだな。」

「了解、じゃあ早速どっかの町で船を調達しましょう。」

やっぱ船と言ったらあれよね。そうゴーイング・メリー号！別に海賊になりたいつもりはないけどあれはロマンよね～。スパロボに出てくるような巨大戦艦にも乗りたいんだけど流石に無理よね。この時代の船はどれも木製だし精霊エンジンも発明されてないから動力は風や手漕ぎとかだし、今シロに言ってもバカにされるのがオチだもんね。でも巨大戦艦には憧れるわよね。やっぱり一番はスパロボOGのクロガネよね。あの艦首のドリルにそそられるわ。まぁハガネも捨てがたいけど、他にもナデシコ、ホワイトベース、アークエンジェル、ミネルバ、超銀河ダイグレン、月光号、ガイキング、マクロスなどなど、どれもいいわよね。いっその事どっかで造船所でもやろうかしら。

「おい！おいイヴ！」

「う～～～ん、なかなか面白そうね～。」

うん、いっそのことエヴァを妹にしたあとどっかで造船所を開く。うん。面白そう。うふふふ～原作開始までまだまだ時間はあるんだから楽しまなきゃね～。

「ヤバいぞ！イヴ！早く避けろ！」

ん？さっきからうるさいわね。シロがなんか慌てているけど何かしら？

「なによ？周りは砂と岩しかない荒野で進行方向はオールグリーンよ？何にぶつかるっていうのよ？」

「前方じゃない！下だ。」

「下？」

アタシは飛行中の竹箒の上から地面を見下ろした。荒野一面が光り出して魔法陣が現れた。

「ん？何これ？」

次の瞬間、地面の至るところから大量の黒い鎖が勢い良く飛び出しアタシ目がけて巻き付いてきた。

「ちょっと何これ！？ねぇ！？」

瞬く間にアタシは黒い鎖でぐるぐる巻きにされバランスを崩し竹箒から地面に落っこちた。

「きゃ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！」

ドスン！

アタシは受け身も取れずそのままお尻から地面に激突した。ついでにアタシの竹箒も一緒に落ちてきた。

「いたたた。もぉ何なのよいったい？お尻打ったわよ！」

とっさに気で防御しなかったら大怪我していたわよ！しかし変ね？

気が上手く練れないわ？何時もなら１０ｍから落ちても気でガードすれば痛くもかゆくも無いのに。アタシは今もぐるぐる巻きの芋虫状態だ。

「これは影の魔法を用いた捕縛結界だな。それもかなり高位な奴で気や魔力の発動を阻害している。」

「捕縛結界？なに魔獣捕獲用の罠でも引っ掛かったの？て言うか気づいていたなら教えなさいよ！」

「お前がボーとしてオイラの話を聞いていなかったのが原因だろう！」

「ボーと何かしてないわよ。今後について考えていたのよ。だいたい罠の感知は、今日はアンタの当番でしょ。もっと早く気付きなさいよ！」

「結界自体えらく巧妙に隠されていて直前まで気がつかなかった。あと結界の発動は自動（オート）ではなく、遠隔（リモート）操作で行われたものだ。おそらくここでオイラ達を待ち伏せしていたんだろう。」

「待ち伏せ？なにまさか昼間の賞金稼ぎの二人組？まさかアタシの正体がばれていたの？」

「いや違うな。こんな高位かつ大規模な捕縛結界を唯の賞金稼ぎが使用できるはずがない。おそらく国か組織の部隊だ。」

「え～～今度はどこの部隊よ。全く迷惑な奴らね。」

ヘラス帝国の魔女討伐魔法騎士団かしらそれともオスティアの対魔

女暗殺部隊？それともどこかの裏の組織の構成員かしら全くどこも暇なんだから。

「でもアタシを捕縛してどうするつもりかしら？」

いままでは寝込みを襲われるのは当たり前で四六時中襲われ続けてきたけど捕縛なんて初めてだわ。そのせいで油断して見事つかまってしまったけど・・・・まぁ何とかなるか。

「それは貴女と交渉する為ですよ。黒髪の魔女殿。」

急にどこからか声が聞こえると黒い軽装の鎧を身に纏った数人の男達が転移魔法で現れた。アタシはこの黒い鎧に見覚えがあった。

「あっ！アンタ達メガロメセンブリアの魔女狩り部隊とか言われている奴らじゃない。ここはヘラス帝国よ、なんでアンタ達がいるの？！」

一番アタシに襲撃を仕掛けてくるのはこいつらなのよ。もうしつこいったらありゃしない。

「ほぉ我々の事を覚えていてくれましたか、光栄です。我々がここにいるのは貴女がここにいるからですよ。我々は俗に言う非正規部隊でして国境などは無意味なのですよ。」

隊長だと思われる中年の男がアタシの発言に対して律儀に返答をしてきた。そういえばそうだった、こいつら国も関係なしでどこでも襲撃してくるんだった。

「なに交渉って？アンタ達アタシを口説きに来たの？アタシはおっ

さんに興味は無いわよ。」

興味あるのは妹だけです。・・・・・・・・・・まぁ弟（可愛い子限定）も一応認めようかしら。

「いえいえ、今回、我々は貴女に和平を申し出に来たのですよ。」

「和平？」

「ええ、５０年前に我々メガロメセンブリアに反旗を翻したトルーフ王国の王子処刑を貴方が妨害したことから始まる貴女と我々の諍いを此処で終わりにしたいのですよ。」

「トルーフ王国の王子？誰それ？」

そんな奴助けたかな？えーーーと５０年前だから・・・・・・・・・。

「お前が助けて賞金首になった原因の男の娘だ。」

「ああ、あの子。へ～～王子だったんだ、あの子。」

そういえば処刑もやけに厳重警備に行われていたわよね。

「もしかして貴方は誰かも知らないで助けたのですか？」

おっさん隊長が少し呆れながら聞いてきた。

「うん。可愛かったから。」

それ以外の理由が必要なのかしら？本当に惜しかったのよね～。女の子にだったらもう理想の妹だったのに・・・まぁ弟もいいかな、なんて考え始めたのはここ数年だけど・・・・少し勿体ない事をしたかしら？

「ま、まぁいいでしょう。その事件以降、貴女は賞金首となり我々の様な存在や賞金稼ぎに追われる事になりました。」

「そう！何とかしなさいよ！アタシすごく迷惑しているんだから！あとこの捕縛結界も解きなさい！アタシを何時まで芋虫状態でいさせる気よ！？」

「大変申し訳ありません。ですが貴女はこうでもしないと我々の話を聞いてくれないでしょう？それに今回の貴女との和平の交渉次第では貴女の賞金も消すことが出来ます。」

「ホント！？じゃあさっさと消しなさいよ。賞金も結界も。」

「それは我々が出す条件・・いえ、お願いに対する貴女の返答次第ですね。」

「お願い？アンタ達アタシになにかさせる気なの？」

まぁ賞金を消してくれるのなら多少の事はしてもいいけど・・・・あまり好きじゃないのよねメガロメセンブリア。でもこいつ等がタダでしてくる方が逆に不気味だし、まぁ聞くだけ聞くか。

「ええ、貴女にしてもらいたい事、それはメガロメセンブリア元老院の一員になって貰いたいのです。」

「はぁ？元老院ですって！？アンタ達の所で一番偉い所じゃない。」

「ええ、その通りです。貴女の今までの実績また民衆の人気を考えれば決して難しい事ではありません。」

「なんで急にそんな話になったのよ？」

今まで問答無用で襲ってきていた癖にまるで掌を返すように態度が変わっているじゃない。

「元々貴女をこちらに招き入れる話はずいぶん前からありましたが貴女を危険視する声も非常に強く今まで実現されませんでした。ですが貴女にこの５０年で蹴散らされた多くの先鋭部隊の被害を考えれば貴女と敵対せず迎え入れようと先日、元老院の間で決定されました。」

「なるほど、なるほど。つまり倒せないから仲間に引き込もうという話ね。」

「そう考えて貰っても構いません。ですがこの話は貴女にも十二分利益のある話だと思いますが？こちらも破格の待遇での勧誘を行っているつもりです。」

ふむ、確かにアタシを元老院の一員にするなんて下手したら自分達の地位すら危ぶまれる一種の賭けの様なものよね。でもそこまでするメリットがメガロメセンブリアにない筈よね？なんでこんな破格の待遇で勧誘してくるのかしら？

（ねぇ、シロなんでいきなりこんな勧誘してくるのかしら？）

アタシはシロに念話（シロとアタシは常にくっついているためどんな環境でも念話可能）を飛ばした。

（ふむ、おそらく各国でお前を勧誘しようと動き始めているのかも知れないな。お前の存在は核兵器と言っても差し支えないからな。下手に敵国などに渡す位なら多少のリスクを背負ってでも自国に引き入れたいのだろう。まぁ元老院に入れてくれるなんて話自体どこまで本当か気になる所だ。確実に裏はあるだろう。）

（ふーーん、政治的判断って奴？あと裏ね～。それでアタシはどうすればいいかしら？）

（好きにすればいい。どうせオイラが何を言ってもお前は勝手に決めるだろう？）

うーーーん、そうよね～メガロメセンブリアか～。考えてみれば元老院に入れば、アタシがメガロメセンブリアを牛耳る事も可能なのよね。それはそれで面白そうだけどね～・・・だけど裏か～アタシ政治とか言葉遊びとかダメだしな～。・・・う～ん・・・・。

「う～～～～ん。わかった。」

「おお、引き受けてもらえますか？」

「いいえ、お断りするわ。」

「何故です？」

おっさん隊長の声が強張った。

「だって政治とか面倒くさいもん。」

色々考えたけどアタシの目的はやっぱり妹ライフを送ることで政治とかには興味ないしそんなアタシが政治家になっても民衆の皆さんに悪いわ。それに権力なんて碌なもんじゃないし。

「では政治とは関係ない好きなポジションを用意しましょう。なんなら軍部や商人ギルドのトップでも構いません。それ以外にも欲しいものがあればこちらですべて用意します。貴女という存在が我が国にいるだけで南部への強力な抑止力となるのです！」

「あーーだから権力とかも別にいらないし欲しいものは自分で手に入れるから、それにアタシは人に縛られるのが嫌いで自由が好きなだけだから。別にアンタ達の勧誘を断ったからと言って他の国や組織の勧誘も受けないから安心して、ね。」

アタシはご飯が食べられて昼寝が出来ればだいたいどこでも暮らせるし。普段の生活では野宿の方が多いし。気楽、気ままな今の生活が気にいっているのよね。まぁ妹がいないのが超不満だけど。だいたい抑止力程度ですます気ないでしょアンタ達。

「・・・・・・そうですか・・・・・・・ですがそうなりますと貴女の賞金は元のこのままとなりますがよろしいので？」

おっさん隊長の声から感情が消えた。

「まぁ仕方がないでしょ？そっちの申し出を断ったんだから今まで通りで行きましょう。フンッ。」

アタシが少し本気で全身に気を込めたら全身に巻き付いていた影の

精霊で編まれた鎖がはじけ飛んで結界が機能を停止した。まぁこの結界内で結界を破壊するような気や魔力を出すことは普通の魔法使いならまず不可能だけどね。すごいぞ！アタシ！

「・・・・・・・ではこちらもそうさせて貰いましょうか。・・・・・・やれ！」

おっさん隊長の号令と共に周りにいた数人の部下達が呪文を唱え始めた。すると其処ら中からから小型の魔法陣次々と出現してそこから異形の怪物たちがぞろぞろ出てきた。

「悪魔の召喚？随分多いわね？二千は軽くいるかしら？」

そんな事を言っていると周りは悪魔だらけとなっていた。

「オイオイ、オレタチ、ヲ、コレダケ、ヨビダシトイテ、アイテハ、コノ、コムスメ、ヒトリカ？」

呼び出された悪魔の一人が可笑しそうにその裂けきった口で笑った。それに釣られて周りの悪魔も笑い始めた。

「油断するな！あれは黒髪の魔女だ。」

おっさん隊長が声を張り上げると周りの悪魔たちはシーン静かになった。

「ヤ、ヤベーナ、トンデモナイ、ハズレ、ジュツシャ、ニ、ヨバレチマッタゼ。」

「オ、オレ、ヨメサン、ト、ガキ、ガ、イルンダ、ショウメツハ、

カンベン、シテ、モライタイゼ。」

「オレナンテ、シンコン、ダゼ、ド、ドウスンダヨ、マッタク。」

今度は悪魔たちが動揺しソワソワし始めた。なんか悪魔から怯えられるって変な感じね。

「ねぇ、アタシってアンタ達からどんな扱いを受けているの？」

アタシは近くにいる悪魔達に聞いてみた。

「アア、アンタ、ヲ、テキ、ニ、マワシテ、オコラセタラ、カクジツ、ニ、ケサレル、カラ、キ、ヲ、ツケロ、ッテ、マカイ、ジャ、オソレラレテ、イルゾ。」

「オレ、ノ、センパイ、アンタ、ノ、ハナシ、ヲ、シテタトキ、フルエ、ナガラ、「アレコソ、ホントウ、ノ、マオウ、ダ」ッテ、イッテ、イタゾ」

「オレ、ノ、ジーチャン、イッテタ、「マジョ、ニ、テ、ヲ、ダスナ、マカイ、ガ、ホロブ」ッテ。」

どんだけ怖がられているのよアタシ！ちょっと傷付くわよ。そりゃ悪魔相手には容赦なくやってきたけど此処まで怖がらなくても・・・・・やっぱり一度キレて数千人を消滅させたのは不味かったかしら？

「まぁいいわ。ぱぱっと片付けてあげるから掛ってきなさい。」

アタシは構えておっさん隊長を挑発した。

「くっ、何をしている。さっさと行け！かかれ！」

おっさん隊長の号令が響く。

その声ともに悪魔たちが躊躇いながらも一斉にアタシに向かってなだれ込んできた。

（シロ敵の数は？）

（術者を合わせると２３４８人だ。）

シロに敵の索敵をしてもらっていたのだ。やっぱ多いわね。面倒だから一発ですますか。

（効果範囲半径３００ｍで足りるかしら。）

（十分だと思うぞ。）

（そう、じゃあやりますか。）

「マジカル・ミラクル・ベリ・ユースフル　集いそして地に広がれ
闇の精霊よ　開け奈落の門　我が憎き敵も　我が愛する者も　全てを闇に引きずりこめ　闇穴道　［ブラックホール］！」

アタシが素早く呪文を唱え終えるとアタシの影が和紙に墨汁を零した様にすさまじい早さで荒野全体に広がって行った。

「こ、これは影か、馬鹿なこれ程の大魔術を一瞬で？くっ！なんだ引きずり込まれるぞ！」

おっさん隊長の慌てる声が聞こえた。もう腰まで引きずり込まれている。周りを見ると岩や悪魔たちも地面に出来た闇に沼に引きずり込まれていった。

「それは影じゃなくて闇よ。一度足を突っ込んだら最後、脱出不可能な闇の底なし沼ってとこかしら。あっ、あと中は高圧力で押しつぶされるから気を付けてね。うーーんゼハハハハハハハハハって笑うべきかしら？」

笑い声を付けるかどうかで軽く悩んだあと周りを見ると広がった闇以外何も無かった。よかった、飛行可能な悪魔が生き残っているかと思ったけど上手く全部引きずり込んだようだ。

「うん、なかなか上手く再現出来たわね闇穴道［ブラックホール］。」

「おい、そろそろ出さないとヤバいぞ。」

そうだった、悪魔どもはともかくおっさん隊長たちはそろそろ出さないと死んじゃうわ。

「そうだったわね。解放［リベレイション］！」

アタシの呪文と共に闇から噴水の如く今まで引きずり込んだ岩や悪魔そしておっさん隊長達が勢いよく噴き出して地面に叩きつけられた。

グチャ、ドカ、グチャ、ドカ、グチャ、グチャ、グチャ、グチャ、グチャ、ドカ、グチャ、グチャ、グチャ、グチャ、ドカ、グチャ、グチャ

完熟したトマトを地面に叩きつけたような音と岩が落ちる音が至る所から聞こえた。悪魔たちは次々と消え魔界へ送還していってボロ布の様なおっさん隊長とその部下だけが残された。アタシは残ったそいつらが死んでないか一人ひとり確かめ動けない程度に魔法で治療しておいた。殺すと色々面倒くさいのよ。何より変なもん背負いたくないし・・・・・・・。

「よし、これで大丈夫っと。まぁアタシを襲うのはいいけど周りの人間巻きこんだらホントに殺すから気をつけてね。どうせ後方に別部隊がいるんでしょ？その内救援が来るんじゃない？」

「・くっ・・ば・・・・化け物め・・・・・・・。」

虫の息のおっさん隊長がそんな失礼な捨て台詞を言って気絶した。

「失礼ね～。こんなピッチピチの３５０歳の可愛い魔女になんてこと言うのかしら。」

まったく・・・・・てっ、ヤバ！今、素で自分の事可愛い魔女なんて言っちゃった。なんかもう引き返せない領域にいるのかな？・・・・・いやいや大丈夫大丈夫、まだアタシの心はまだ男のハズ。

「一先ずエヴァね。エヴァと会えばお兄ちゃん魂で完全に男の心に戻る筈よ。うん。」

「何訳わかんない事を言っている？さっさと行くぞ。そのエヴァと会うためにやらなきゃならない事が沢山あるんだぞ。あといい加減あの始動キーどうにかならんのか知性が全く感じられん。」

「ハイハイ、分かったわよ。始動キーはあれが一番覚えやすいのよ。意味も解りやすいしいいじゃない。あれ考えるのに3日も夜も寝ないで昼寝して考えた大作よ。」

アタシは地面に落ちた竹箒を拾い上げ跨りまた荒野を飛行し始めた。おっ、バスケットの中のサンドイッチはかろうじて無事だ。

さて、行きますか。

「待ってなさい。アタシの妹一号、エヴァちゃん。ウフフフフフフフフフフフフフ」

アタシはまだ見ぬ妹との楽しい生活に希望を抱かせ竹箒を加速させた。

だがこの時のアタシは知る由も無かった。この十数年後に出会うエヴァによってアタシの計画が早くも完全崩壊することを・・・・・・・・・・・。

5話　エヴァンジェリンといっしょ

・エヴァンジェリンといっしょ

皇暦５１８年（西暦１５０３年）

現実世界の月が綺麗などこかの海域、一隻のキャラベル船が漂っていた。船の艦首にはデフォルメされた羊の頭が付いており、またメインマストにはとんがり帽子をかぶった骸骨の海賊旗（ジョリー・ロジャー）が掲げられていた。

この船の一室で二人の女性が向き合っていた。一人は長い黒髪に長身の２０代の女性で名をイヴといい。もう一人は長い金髪の１０歳ほどの容姿の少女で名をエヴァンジェリン・Ａ（アタナシオ）・Ｋ・マクダウェルという。この二人は３０分前からこうして無言で向かい合っていた。

しかし痺れを切らしたのかイヴの方から話し始めた。

ＳＩＤＥ　イヴ

「ねぇエヴァ、アナタもわかるでしょう？アタシの言いたいこと。」

アタシは目の前のエヴァと目線を合わせるため膝を折り、腰を屈めて、エヴァに話しかけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

エヴァはベッドに腰かけ俯いてなにも答えない。

「アタシは別にあなたが嫌いになった訳じゃないの。それにこれはアナタの為でもあるの。別に離れる訳じゃないんだからね。分かって、ね。」

アタシはエヴァに言い聞かせるように優しく言った。

「・・・・・・・・・・イヤだ。・・・・・・・・・・・・・・・・
」

しかしエヴァからは小さな声ながらはっきりした拒否の回答が聞こえた。

「エヴァお願いだか「イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！」・・はぁ。」

アタシはもう一度説得しようとしたが今度は大きな声での強い拒否を示してきた。不味いこのままだと昨日の夜と全く同じ結末を迎えてしまう。

「イヤだぞ！一人で寝るなんて寂しいぞ。」

「寂しいってアナタもう１００歳過ぎているのよ。だいたい一人で寝るって言たって同じ部屋の違うベッドで寝ようって言っているだけじゃない。」

「イヤだ！私は同じベッドが良いのだ。」

「エヴァあんまり我が侭言うと「・・・ヒック・・・・・」・・・・うっ・・・。」

エヴァは目に涙を溜め嗚咽し出した。ま、不味い。

「ヒック・・・一緒に・・ヒック・・寝るのだ。」

「うう、ダメったらダメ！」

ううう、負けるなアタシ、１年かけてここまで話を持って来たんだ。あと少しがんばれアタシ！

「う～～～～～、う～～～～～～～～、う～～～～～～～。」

エヴァが唸りながらアタシの服の袖を引っ張り始めた。ヤバイ心が・・・・。

「・・・・（うるうるうるうるうるうる）・・・・・・・。」

やめて！そんな上目遣いで見つめないで！り、理性が・・・・・・・（プチッ）・・・・・・キレた。

「きょ、今日で最後よ。ホントしょうがない子ね～。も～。」

ああ、アタシってホントにダメね。

「うむ。」

エヴァは涙を溜めながら満足そうに頷いて両手で前髪をかき分けお

でこを出した。

「おやすみのチューだ。」

はぁ、本当に育て方を間違えたかしら・・・・・・。

「分かったわよ、も～。」

アタシはエヴァのおでこにおやすみのキスをした。もう１００年程一緒にいるけどこの子ホントにこういう所は成長しないわね・・・・・大丈夫かしら?。

ちゅっ！

「ん～～～～～。」

エヴァは目を細め、頬を赤らめ嬉しそうに唸り声を上げた。

可愛い。本当に可愛い。ここまで可愛くなってくれたのは本当に嬉しいが何時もこの後のエヴァのセリフで絶望に叩き落とされるのだ。

「ハイ！もう寝るわよ。お休み、エヴァ。」

アタシは先にベッドの中に入りエヴァを抱き寄せた。エヴァは抵抗することなくアタシに抱き寄せられアタシの胸に顔を埋めて嬉しそうに言うのだ、あのセリフを・・・・・・。

「うむ、お休みだ。母様。」

そう言うとエヴァはアタシの胸を枕にしてスヤスヤと眠り始めた。

相変わらず、寝るの早っ！

はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、なんでこんなことになったのだろう。アタシの願いはただエヴァにお兄ちゃん呼んで欲しいだけなのに・・・・・・まぁ、今は女の体なのだから１兆歩譲ってお姉様（おねいちゃんも可）で呼ばれることも許容した。しかし母様ってなに？どんなジャンル？アタシ結婚もしていないのに・・・・・・子連れ狼って奴？おお、憎き神よ、アタシがいったい何をした？だいたい母様なんて呼ばれても萌えも何も感じないのよ！ああ憎い１００年前のアタシを今すぐ八つ裂きにしたい！

ガチャ

アタシが愚痴を心の中で唱えていると部屋のドアが開いた、そこから酒瓶とグラスを２つ持った全長５０？程の人形が入ってきた。

「ん？どうしたのチャチャゼロ？」

「オウ、暇ダカラ、一緒ニ飲モウトオモッテナ。モウ御主人ハネタノカ？」

「ええ、エヴァはもう寝たわよ。寝付きがホントにいいのよこの子。でもアタシの胸を枕にするのはいい加減やめて欲しいわ。」

今はアタシの状態はベッドに仰向けに寝ておりでその上にエヴァが覆いかぶさるようにうつ伏せでアタシの胸を枕にして眠っている。胸の谷間に顔をスッポリ埋めてスヤスヤと眠っている。息苦しくないのかしらこの子？

「ソコガ一番ヨク寝ムレルッテ御主人ガマエニ言ッテタゼ。ツーカ、マタ説得シッパイカヨ。」

相変わらず感情の籠らない棒読みでこの従者人形は痛いところを突いてきた。

「うっ！し、仕方ないでしょ。あんな目で見られたら断れないわよ。」

「ソノセリフ、オレハ１０００回ハ聞イタゼ。ケケケケケケケケケケ。」

チャチャゼロは笑いながら酒瓶を開けグラスにお酒を入れ始めた。

「ホラヨ。」

そのお酒を入れられた２つのグラスの１つをアタシに渡した。

アタシは上半身を起してグラスを受け取った。その間もエヴァは爆睡中であり更に両手両足をアタシの胴体に絡ませて木にしがみ付くコアラの様にしてアタシから離れようとしない。こういう所がホント微笑ましいのよねこの子。

「ん、ありがとう。」

アタシはグラスを受け取った。

「タク、御主人モイイカゲンイイ歳ナンダカラ自立シロヨ。」

チャチャゼロが棒読みで愚痴を言い始めた。

「ホントよね～。あとアタシの事を母様なんて呼ぶのやめて欲しいわ。」

「ツーカ原因ハアンタガ御主人を甘ヤカスカラダロ？アト御主人知ラナイゼ、アンタガ母様ってヨバレルノ嫌ガッテルノ。」

「はぁ、そうよね、アタシが悪いのよね。あと仮にあの子がアタシが嫌がっている事知っても直さないと思うわよ。」

「ダロウナ、アンタノコト完全二母親トシカ認識シテネーカラナ。ケケケケケケ。」

「そうよね、はぁ。どうしてこうなったのかしら？」

「それはお前がお人好しすぎるからだろうイヴ？」

「そうでシュ、そうでシュ、シロ兄様の言う通りでシュ。」

アタシが愚痴っていると口うるさい蛇兄妹が二匹ともアタシの腕に巻き付いてきて嫌味を言ってきた。

「うるさいわね！シロもクロもアンタ達船は大丈夫なの？」

「ゴーイング・メリー号は問題なく運航中だ。」

「索敵結界に反応無し、また高精度お天気占いでの天候予測も問題なしでシュ。」

「ならいいけど。」

この語尾に「～シュ」とつけて話しているのは黒蛇型の電子精霊のクロだ。今から１００年前アタシが現実世界を行くためにシロが作った電子精霊で本体はアタシの中指の指輪である。シロ曰く「万人長クラスの性能を持った電子精霊だ」とのことだ。しかしこの子性格が生意気な上アタシの言うことを全然聞きやしないしシロに対しては「シロ兄様」なのにアタシに対しては「イヴちゃん」って呼ぶし何この差？なんでアイツがお兄様って呼ばれてるのよアタシも呼びなさいよ！クロに言ったら「シロ兄様が一番上手くクロを使えるからでシュ。でもイヴちゃんじゃ一割も性能を引き出せないからでシュ～。」なんて言ってくるしくーーーー確かにアタシじゃ電子精霊は上手く扱えないわよ。前世でもパソコンはインターネット以外使ってなかったし・・・はぁ。

ちなみにゴーイング・メリー号の運航はこの蛇兄妹が行っている。碇や帆の上げ下げから船の操舵まで魔法で全自動である（魔力はアタシから出ている）。そのほかにも索敵、防御、認識阻害などの各種結界、クロを利用した高精度お天気お占い機能なども付いている。

「だいたい１００年前エヴァンジェリンがお前を母様と呼びたいと言った時に拒否すれば全て解決した問題だろう。」

シロが痛い所を突いてきた。

「うっ、仕方ないでしょ。あんな泣きそうな顔でお願いされたら誰だって頷いちゃうわよ。」

今から１００年前、魔法世界でようやく船と電子精霊が完成した。電子精霊はこのバカ蛇二号のクロで船はゴーイング・メリー号をモ

デルにしてマークだけはアタシのオリジナルにした。なんで海賊旗（ジョリー・ロジャー）なんか掲げたかと言うと一言で言うとノリ以外の何物でもないが、まぁこれから真祖の吸血鬼であるエヴァを妹にするから世界に対してのアタシの決意と信念を世に知らしめる意味も持ち合わせていると後付けの理由をつけといた。

そしてアタシはクロとメリー号のおかげで無事に現実世界に渡ることが出来た。到着した場所は地中海でそこからエヴァ探しをスタートした。初めは手掛かりが全くなかったのでしらみつぶしに情報収集を行った。そこで分かったのはエヴァは数年前に吸血鬼化して逃げ回っているという情報だった。早速アタシはエヴァ捜索に乗り出し見事深い森の中（シロがい言うには黒い森という所らしい）で発見した。

発見したエヴァはボロ布を身に纏い殺気と憎しみを込めた目で睨みつけてきた（原作比３０倍くらい怖かった）。ある日突然吸血鬼にされ散々追いかけまわされたのだろうすっかり心を閉ざし世界の全てを憎む様な形相を浮かべていた。同時に今にも泣きそうなのを必死に我慢しているようにも見えた・・・・・。ここは、お兄ちゃん云々は置いといてエヴァから信頼を勝ち取ることが先決だと思ったアタシは、最初エヴァとただ一緒にいることにした。特にやることは無いエヴァに付いて回って身の回りの世話し追手を追い払うだけだ。最初はエヴァから「ウザい」「死ね」「消えろ」位しか話してもらえず、毎晩寝込みを襲われたが魔法も碌に使えず戦闘経験もないエヴァがアタシに敵う筈もなく軽く捻ってやった。血に関してはアタシから吸わせた初めの内は致死量まで吸われて何度か仮死化しかけたがアタシが不老不死だと知っていくら吸っても死なないと分かると献血程度しか吸わなくなった。そんな生活を続けていると少しであるがエヴァもアタシに心を開いて色々と話してくれた。お互い日常会話くらいするようになる頃には魔法をエヴァに教え始め

た。

そんな関係が何年か続いたある日エヴァは恥ずかしそうに「母様と呼んでいいか」言ってきたのだ。・・・・・アタシはエヴァの信頼を勝ち取ることには成功したようだがどうやら勝ち取り過ぎてしまった様だ。不味いここで頷いたらアタシは一生この子の母親になってしまうそれは阻止しなければと考えていると「ダメか？」と泣きそうな顔で聞いてくるのだアタシは咄嗟に「そんなことないわ。いいわよ。」って答えてしまったのだ。くーーーアタシのバカ、バカ、バカ、バカ。ついでにチャチャゼロが出来たのはこの頃だ。

以降アタシはずっとこの子のお母さんである。はぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜。

関係が親子（仮）になってからはすっかり心を開いてくれたが甘え方が半端なかった。一緒に寝るのは当たり前で四六時中べったりで離れている時はトイレ位のものだ。はぁ、これでお兄ちゃん、お姉様（おねいちゃん可）と呼んでくれたらアタシも萌え萌えの泣いて喜ぶ展開なのだが母様って呼ばれるとなんか違うのよね〜。なんか最近は感覚が母親の様になってきたのか、このアタシにべったりのエヴァはダメだと思い始め独立させようと奮起している最中であるがなかなか上手くいっておらず現在に至る。もっと厳しくしないとダメなのかしら・・・。

「だいたいお前はエヴァンジェリンに甘い。」

シロお得意の嫌みがまだ続く。

「で、でも戦闘や魔法技術に関しては厳しくやっているつもりよ。それにホントに悪い事をしたら怒っているわよ。」

「アア、オメー御主人二修業ツケテイル時、トンデモナク厳シイカラナ。御主人、毎回マジ泣キシテルゾ。ソレニ、アンタガ本当ニキレタ時ハ御主人ホントウ二怯エテルカラナ。ケケケケケケケ」

エヴァの修業についてはホントに厳しくやってきたつもりだ。いくらアタシが守っているからと言って戦闘スキルは必須であるし一人で生きていく術も必要だ。だからそれらについては一切情を挟まずに教えてきたつもりだ。時には真祖であることをいいことに普通の術者なら即死するような魔法も雨あられのように唱え、体術に関しても必殺技を出しまくった。おかげでエヴァは小国位なら一人で滅ぼせる位の技量を身につけ恐らく後は百年位したら原作と同じくらいの実力になるだろう。あと闇の魔法についてはアタシとエヴァで合作した。

まぁ、そういう所で厳しくしている分、他で甘くなっちゃうのよね〜。

「でもそろそろ自立してもらわないと困るわ。」

何時までもべったりっていう訳にはいかないしこのままエヴァのお母さんでいたら原作が始まった時に他の子たちから「エヴァちゃんのお母さん」なんて呼ばれてしまうわ。何その立ち位置？とてもじゃないけどそんな立場ではお兄ちゃんどころかお姉様なんて呼ばれる訳がない。呼ばれて「おばさん」である。ヤバイヤバイ、ホントにヤバイ。

「その為に少しずつエヴァを親離れさせようと言ったのが1年前全く進んで無いな」

「全くでシュ、イヴちゃんの甘さは砂糖より甘いでシュ。」

アタシの腕に絡まっている蛇兄妹が呆れながら頭を左右に振った。

「うるさいわね。明日よ明日！明日こそは上手くやってやるわよ！もう寝る、お休み。」

アタシは自分に言い聞かせるようにしてグラスのワインを飲み干すとベッドに横になり眠りに付いた。

「まぁ期待はしてないが応援しているぞ、イヴ。」

「イヴちゃん、ファイトでシュ。シュルシュルシュル～。」

「マァ、オレハドッチデモイインダガ、ガンバレ。」

きーーーーーーーーー。見てなさい、絶対に親離れさせてお姉様って呼ばせて最終的にはお兄ちゃんって呼ばせるんだから。

アタシはそう心に誓うと夢の中に落ちて行った。

イヴが寝付いたあとチャチャゼロはイヴの上で寝ているエヴァンジェリンを揺すって起こし始めた。

「オイ、起キロ御主人」

「うーーーん、ん？チャチャゼロか、どうだった？」

眠い眼を擦りながらエヴァは体を起こしチャチャゼロの報告を聞いた。

「アア、問題ネーナ、暫クハコノママノ対応デ良イハズダ。アト御主人ハ、イヴノ思惑ヲ知ラナイト言ットイタゾ。」

チャチャゼロは今までイヴと話していた内容をエヴァに報告した。

「うむ、よくやったチャチャゼロ。お前たちからは何かないか？」

そうエヴァが言うとベッドの毛布から二匹の蛇が出てきた。

「オイラからは特にないな、だが最近対応がマンネリ化してきているから甘えるレパートリーは増やすべきだ。」

「クロもそう思いましュ。」

「む、そうか確かにここ１０年増やしてないな。」

蛇兄妹の報告でエヴァは考え始めた。実はイヴを抜かしたメリー号のクルーは全員結託しエヴァの味方していたのだ。

「シカシ、イヴノ奴モ本当ニオ人好シダナ。オレタチ全員御主人ト繋ガッテイルナンテ毛ホドモ疑ッテネーナ。ケケケ。」

「む、おい！チャチャゼロ、母様の悪口を言うな！」

チャチャゼロの発言にエヴァが怒り始めた。

「だがイヴのお人好しなのはオイラも同感だ。」

「そうでシュ、そうでシュ、クロもそう思いましュ。」

蛇兄妹もチャチャゼロに賛同した。

「きき、貴様ら母様は困った人を見たらほっとけないのだ。」

「そのせいで何度敵の罠に嵌まった事か。」

「そうでシュ！酷い時は自分が騙された事すら気づいてないお馬鹿さんでシュ。」

「むむむ、はぁ、その通りだ。だから私が母様をしっかり守らなければならんのだ！」

そう言うとエヴァはスヤスヤ寝ているイヴの顔を覗き込んだ。エヴァは壊れ物を触るようにイヴの頬を撫でた。

「独り立ちしろ？なんて馬鹿なことを言うのだ？私の居場所は母様（ここ）だけだ。それに私は母様の胸でなければ寝られん。」

そう１００年前に自分見つけて守って育ててくれたこの人こそ自分の光なのだ。決して離したりなんかしない。

「くくくっ、しかし母様もだんだん母親らしくなってきたとは思わんか？シロ？」

「確かにな昔はお前が甘えたら（エヴァンジェリン）甘えた分だけそれに応えていたが最近はそれじゃ駄目だと言って色々考えているようだしな。」

「そうか、ではそろそろ計画を実行に移すか。」

「ほぉ、いよいよやるのか「完全なる母様」計画を。」

「完全なる母様」計画それはエヴァンジェリンが用意周到に今まで計画してきたものである。イヴが母親役をやりたがっていない事はエヴァもすぐに分かった。しかしエヴァ自身はイヴに母親でいて欲しかったのだ。しかし力技ではエヴァはイヴに決して勝てない。そこでこの計画である。自分が甘えん坊でダメな娘を演じて（本人は演技と言い張っているが周りからみると素でやってるようにしか見えない）母性本能を膨らませてお母さんとしての感覚強めようという計画の下準備は完了した。いよいよ実行に移す時が来たのだ。

「そうだ、母様を「完全なる母様」であるイヴ・マクダウェルにす

るこの計画を！妹？弟？そんな物私にも母様にも要らない存在だ。ここには私と母様の二人で十分なのだ。」

「別にいいが「完全なる母様」はお淑やかにする約束を忘れてないよな？」

シロがエヴァに確認する。どうやら薄暗い裏取引があったようだ。

「無論だ、約束は守る。さてもう寝るか明日から忙しくなるぞ。それに明日は採血の日だ。」

エヴァが楽しそうに宣言した。採血の日とはエヴァがイヴの血を吸血する日で週二回行われる。

「しかしエヴァンジェリン、乳房から吸血するのはどうかと思うぞ。イヴが毎回本気で嫌がっているぞ。」

「そうでシュ、エヴァちゃん赤ちゃんみたいでシュ。」

「オレモアレハ止メタホウガイイト思ウゼ。」

「うっ。し、仕方がないだろう。あ、あそこから吸うのが何故か一番美味いのだ。ともかく寝るぞ！」

そう言うとエヴァはイヴの胸に飛び込み顔を埋めてスヤスヤと眠りに付いた。

「まぁいいかオイラはイヴがお嬢様になれば何でもいいや。オイラも寝るお休み。」

「クロも寝まシュ。お休みでシュ。」

そう言うと蛇兄妹は毛布の中に入って行った。

「オレハデッキデ星デモ数エルカ。アー暇ダ人切リ刻ミテー。」

そう言うとチャチャゼロは部屋を後にした。

ついに動き出したエヴァンジェリンの「完全なる母様」計画。果たしてイヴはこのピンチを乗り越えられるのか。そして自分の周りに味方がいない事にいつ気付くイヴ？イヴの明日はどっちだ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3205o/

ＴＳ転生者のドタバタ冒険記

2011年1月10日16時14分発行